路上文芸総合雑誌『露〈Rojuku〉宿』　２００４年５月１日発行

露宿

第30号

ROJUKU

露宿

目次

表紙写真	石井武志	
文中写真	笠井和明	
あいたくて	工藤直子	2
空気ー	まどみちお	3
八首	いわせまこと	5
新宿駅/新宿中央公園	Fuyuko	7
ドンチャカ節	ゆげこうすけ	9
五行詩	近松雅之	10
背負子ほか	トレンディ若人	11
朝太郎の箱船	鈴木克彦(挿し絵も)	13
新編マンモス交番	望月大成(挿し絵も)	19
右手に「新宿連絡会」…ほか	田代猛	23
無題	五林修	25
今日一日	只野酔払	27
無題い	A・S	30
炊き出しほか	秋戸空ほか	29
地獄の季節	名無しの権平衛さん	35
惑星ひとつぶ通信	高橋美香	36
あかい花	はり師いが丸	37
みなさんへ	恩田美代子	38
編集後記		

あいたくて

工藤　直子

だれかに　あいたくて
なにかに　あいたくて
生まれてきた―
そんな気がするのだけれど

それが　だれなのか　なになのか
あえるのは　いつなのか―
おつかいの　とちゅうで
迷ってしまった子どもみたい
とほうに　くれている

それでも　手のなかに
みえないことづけを
にぎりしめているような気がするから
それを手わたさなくちゃ
だから

あいたくて

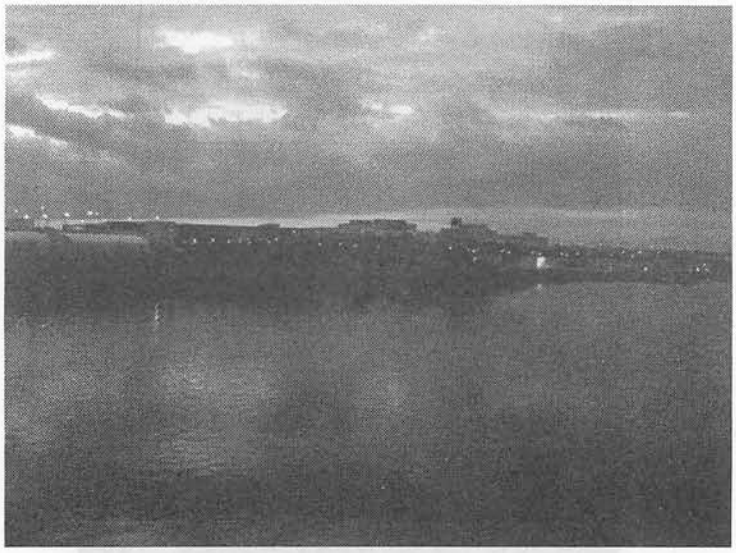
空気

まど　みちお

ぼくの　胸の中に
いま　入ってきたのは
いままで　ママの胸の中にいた空気
そしてぼくが　いま吐いた空気は
もう　パパの胸の中に　入っていく

同じ家に　住んでおれば
いや同じ国に住んでおれば
いやいや　同じ地球に住んでおれば
いつかは
同じ空気が　入れかわるのだ
ありとあらゆる　生き物の胸の中を

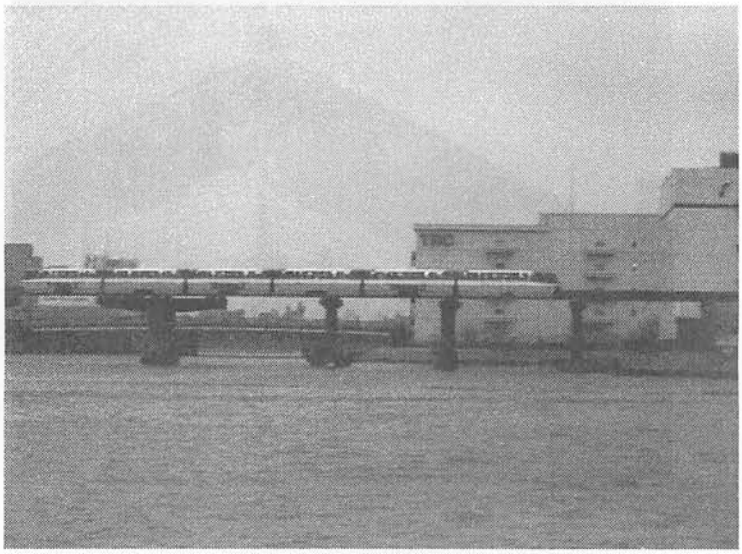
きのう庭のアリの胸の中にいた空気が
いま　妹の胸の中に　入っていく
空気はびっくりぎょうてんしているのか？



なんの　同じ空気が　ついこの間は
南氷洋の
クジラの胸の中に　いたのだ

5月
ぼくの心が　いま
すきとおりそうに　清々(すがすが)しいのは
見わたす青葉たちの　吐く空気が
ぼくらに入り
ぼくらを内側から
緑にそめあげてくれているのだ

一つの体をめぐる
血の　せせらぎのように
胸から　胸へ
一つの地球をめぐる　空気のせせらぎ！
それは　うたっているのか
忘れないで　忘れないで…と
すべての生き物が兄弟であることを



八首

いわせ　まこと

昔より足らぬ奴だと侮られ
今朝また親方（おやじ）のば声をあびる

かなわぬか妻子をかかえる吾が願い
飯場便所に一人手淫す

たえ難き侮べつにたえてツル握り
小さき声で技師をののしる

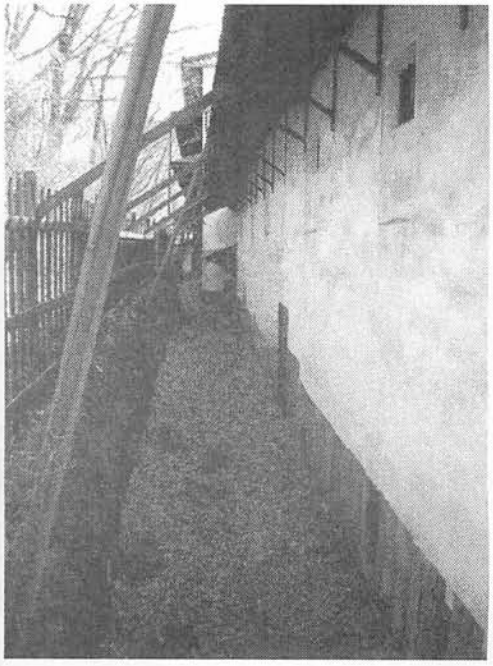
「バカ！アホ！」とけり石のごとき吾なれば
妻持つ夢は分を知らずか

「めしぬき」と（施設）園母に言われし幼き日
夢に浮かびて明けに目覚める

ひもじさに菓子を盗みし園の日々
仕置のキズは今なお残り

風邪を病みもつれる足をしかりつけ
しぐれの一日をセメント運ぶ

親方に仕事干すこと脅されて
膿出し足を地下足袋に押し込む



新宿駅

Fuyuko

新しき
駕籠に　ハムスター
飼いおりぬ
新宿駅の
家なき男は

日も浅く
茫然とすわりぬ
階段に
信じ難くも
ホームレスとなりて

デパートの
入り口が定宿
灯が消えて
闇が来るまで
しばしの読書
すわりこむ

人に駆け寄り
中年の
ガードマンなぜ
言葉やさしく

散髪し、
サラリーマン
コートを選ぶ
山手線居眠り
うとまれぬため

給料も
定期券さえ
ありながら
家持てぬ身の
苦い秘密

ダンボールに
横たわることに
慣れなくて
ひたすら歩く
始発までの夜

新宿中央公園

草むらに
狙うレンズあり
高原に
憩う　動物
にしもあらぬを

哀しきは
炊き出しを待つ
ベンチにて
白きページに
さくら散りぬる

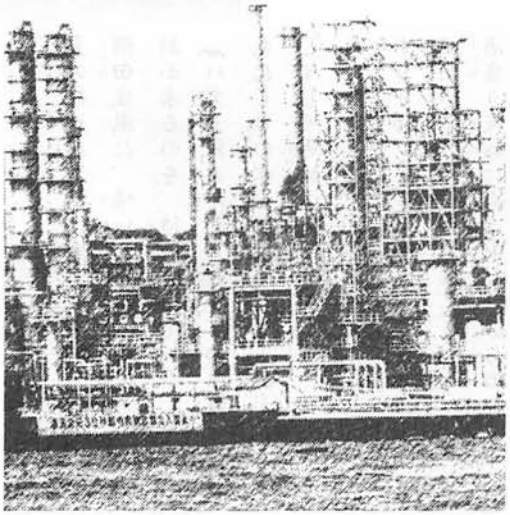
口論の
果てにいでしも
青山の
アパートまでは
歩くに遠く

面接と
強がっている
スーツとタイ
家を出た日の
姿そのまま

一箱の
煙草をさえも
買えぬ日を
夢思いしや
先月までは

１６０円
地下鉄惜しみ
片道
三時間歩き
炊き出しに行く

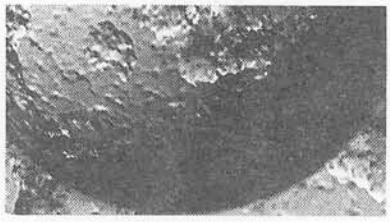
故郷の
老いたる父母よ
命なき
白き画面の
携帯見つめ



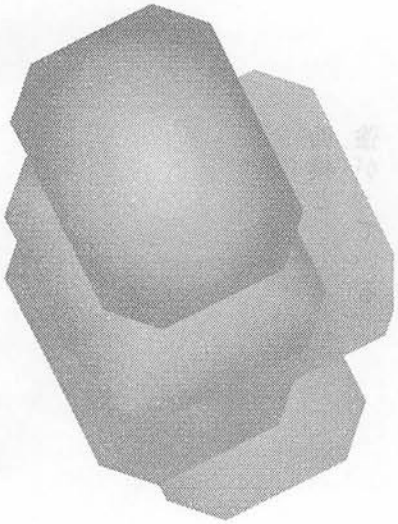
（一）
春の十六夜、屋形船、
江戸の名残りを、引っ提げて
今じゃ東京の、新名所。
〽ハァー月のちょいと出を、夜明けとおもうて、
さまを帰えーて、オハラハァー気に掛かる〽
つぶらな乙女の、赤提灯も
ドンチャカ騒ぎで、浮かれ出す
ドンチャカ、ドンドン、ドンチャドン、
風にそよそよ、心地良く
酒盛り夜船や、三味線いらぬ
小皿叩いて、お銚子ふって、
時々汽笛が鳴ればいい。
蛸は釜茹で入道顔、
烏賊の丸焼き、烏賊の丸焼き、
とこ姐さん、焼け太り
呑めや唄いや、唄いや踊れ、
ドドント、ドドント、ドドントね
エルミネーション、キラキラと
河岸の柳も、艶やかに

ドンチャカ節

ゆげこうすけ



挿入歌『おりくさん』
出来るだけ、お色気たっぷりに。
♪♪ 酔えばほんのりレレレレレ、レレレ
レレレ、レレレレ、おりくさん
徳利片手に、レレレレ、レレレ
レレレ レレレレ、与大さんが
ササエーエー港町 ♪♪



（二）
夏の短か夜、明け烏…
隅田夜風に、啼いている、
朝が来るのを、待ち兼ねて。
〽ハァー見えた見えたよ、松原越しに、
丸にじゆの字のオハラハァー帆が見えた
じゃじゃ馬娘の豆提灯も、
ドンチャカ騒ぎで踊り出す
ドンチカ、ドンドン、ドンチャカドン
風にさやさや、ゆらゆらと
酒盛り夜船にや、太鼓はいらぬ
板子叩いて手拍子打って
時々飛沫が、窓を打つ、
磯の鮑の片思い、
茄子も南瓜も、茄子も南瓜も、
とこ姐さん、恋の味、
呑めや唄いや、唄いや踊れ、
ドドント、ドドント、ドドントね、
仕掛け花火も、にぎやかに、
呑んで騒いで、夜が明ける。

五行詩

地獄

彼は地獄を見たゆえ
憎しみに満ちた
またそのために
優しくなれた
そんな気がする

仕事

意味のない仕事
追われて体が
限界だ
せめて少し
好きにできたら

血

生傷から
時に滴下する
風に消されても
留めていたい
仮面の下に

記録

砂に刻んだ言葉
砂は水に変わり
水は風になり
何もなくなった
言葉も足跡も

紅い月

旅に出たくて
仕事を辞めた
嘘のように
でかくて紅い月
見たのは確か

知ってる

誰にも言わず
決めたこと
何にも知らず
流されたこと
君は知ってる

惰眠

万券ばらまいた
ベッドで見る夢
くだらない夢
起きて働け
けどもう少し

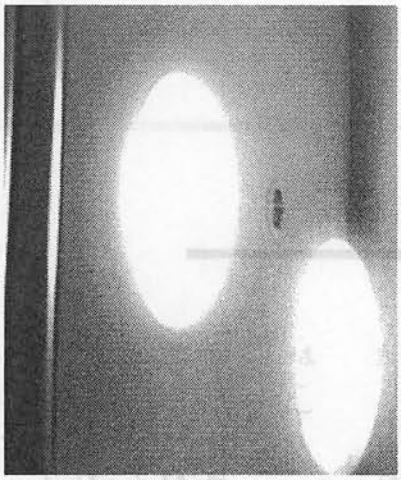
灰

通り過ぎた記憶
視線を感じて
見上げると月
灰になるには
まだ早い

近松　雅之

背負子（しょいこ）　別れの朝

トレンディ若人



朝、いつもと同じ時間に駅へと向かった。その街での最後の出勤だった。こっちに向かって大きな荷物を背負ったあのお婆さんがやって来た。

ちゃんと挨拶しょうか―。私は歩きながら迷い続けた。その街から通勤するようになって毎日すれ違うお婆さんだった。タオルを頭に巻き顔は日焼けて黒かった。

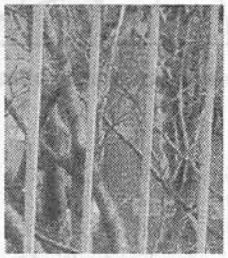
時々荷物の上から大根の葉っぱや青物野菜、きれいな花々が顔をのぞかせていることがあり、電車に乗って野菜や花を売りに来ている人のようだった。背負子（しょいこ）の紐を肩に食い込ませ、少し前かがみになって一歩一歩しっかりと道を踏みしめるように歩いてくる。それでもいつも笑みを絶やしたことはない。暑い日も寒い日も雨の日も風の日もいつも変わらぬ笑顔だった。いつのころからか私はお婆さんとすれ違うことが楽しみになっていた。その笑顔に元気づけられる思いだった。

『子供を育てられたのも、健康なのも、こうして働くことができたから。ありがたいことです』私の「たいへんだなあ」と思う心に、お婆さんの笑顔はそう答えているように思えた。お婆さんに出会ってから、仕事のグチをいうのはやめにした。問題を酒場まで持ち込むことをしなくなった。お婆さんとすれ違うとき、私はいつも小さく頭を下げていた。人込みの中なので気づかれることはなかった。

「ありがとうございました。明日、転勤でこの街を離れます。お元気で」そう挨拶しようかと思った。でも、いきなりそういったらびっくりさせることになるだろうか―。

躊躇している間にすれ違った。お婆さんはいつもと変わらぬ笑顔だった。私は小さく頭を下げた。お婆さ

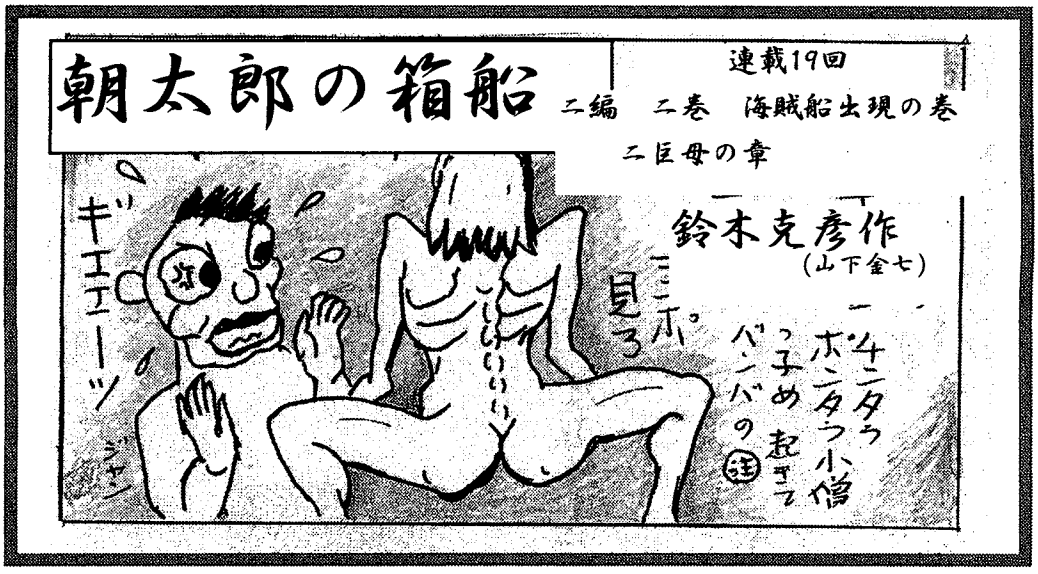
んは気づかずに通りすぎた。
立ち止まり、後ろ姿に深く頭を下げて心の中でお別れを言った。そうしたかった。顔をあげると、お婆さんの後ろ姿があたたかく濡れて歪んだ。



腸腐る病に伏して蔦紅葉
点滴具連れて歩めばそぞう寒
空也忌に鼻からはらわた抜いている
小春空もすこし生きていたくなる
病室の窓明けゆくや去年今年

仲間と闘い抜いた山谷地区

主治医のA先生に、「正月過ぎまで生きられるでしょうか」と尋ねてみたが、イエスの返事はついに得られなかった。そこで、どうせ残り少ないいのちなら、後に残る家族のため、親しい友人たちのため、私の発病から死までを努めて冷静、客観的に書きとめておこう、こうして病室に閉じ込められている身の上では、それ以外に意味のある仕事もできそうにないから、という気になった。



語り部が不在の時に現われた何者かが
マイクを取って語るよう
アクマ以外に力なく　アクマ以外に主
権なし
―ときの王様（どうも朝太郎殿下
を飛び越えてアクマ様に語っている
らしい）
それがしは彼ら芸術家　アクマ教信
者の意見を総合してみるに　彼らの
思いは何か祈る対象　母なるものの
像の建設に向いているように思われ
るのでございます
我らをウミしは玄ピンなる闇の母　ピ
ンピンなる闇の父　形なくヨウとし
て薄暗く　ネバネバとした得体の知
れぬエネルギー
ものを生みダス力はアクマの悪徳　汝
のアワから生まれたアフロディテの
源をサグってみても　奈落の帝王シ
ヴァ神や妃神の生としイケルものの
血を司どるカーリーにしても生臭い
血の中にあり　その御神体は陽根
（リンガ）ヨニ（子宮）に象徴され
るもの
総ては種の礼参　豊穣の女神と生殖神
男根と女陰崇拝に帰結する　これぞ
アクマ教

アクマは無始無終にして犯すべカラズ
その元は闇の発光体　見れども見え
ず　聴けども聴こえぬ妖艶体　もど
かしくもむずがゆくも　定めかねつ
る不定形　ユエニ何者もその像を刻
んではならぬ
だが痴狂人普通人は弱いもの　不安と
恐怖に包囲されてる生き物　時間も
空間も存在せぬような箱船生活の中
に　時間的クギリとアクマの象徴を
求めたい　通過儀礼が欲しい　空莫
たる空間にオベリスクあるいはカチ
クのように囲いが欲しい
処詮　三千年の世界の中　ケシツブの
ような地球に生きる我らウジ虫　祈
る対象が欲しい　これがないと人と
して狂人としての基準が定まらない
刻んでナラヌ描いてならぬ不立文字
教外別伝　真指心伝がチットも伝わ
らぬ　両手総身でシガミ付く　夜陰
に乗じて石女がそっと陰部をおしつ
ける立像がホシイ
人智及ばぬ無久の宇宙創造大魔人　女
形か男形か中性かは知らないが　我
らクレジニアの偶像としたい―
それがしが直接聞き及びした汝らのナ
マの声は次のようなものでございま

ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO

した

『泣いているよな　狂っているよな地
　蔵様
かわいい小供の姿で立って
片手に宝珠　片手に錫杖持って
宝はバカに与えられると宝珠を下さる
生きては苦しみ　死んでは無闇の地獄
責められのたうち回る我ら妄者を哀
　れみ
錫杖でお救い下さる尊き地蔵様』
他にもアクマ様を讃える賛悪歌

『土と水と火と風と闇を司どる　アク
　マ神はホマレなれ　それぞれが互
　にカスカな音を出し　様々な楽の
　音を奏でる
アクマが宇宙　東西南北それぞれに
　フシギな大陸があり　そのひとつ
　が南タンブ州なるクレジニア　ユ
　ートピア
でもそこへ行きつくまでに　いつ爆
　発するか　沈むかも知れない朝太
　郎船　あるいは飢え死ぬまで　拝
　み倒したい巨母の像』
『あっちからクル人宇宙人　こっちに
　いる人宇宙人

そばにいるのも　土掘る人もみな互
　にことばが通じない　ワカラない
異なった星からキタ人達が　言語思
　想まるで違って意思が計れない
どこかの大学と同じように　教室の学
　生ひとりひとりが何を聞いても何
　を言ってもチンプンカンプン
それでも自分の言ってることだけは
　分かるらしくて　しきりに自分の
　ことばにウナズイている
これじゃあ船の人々のコミニケーシ
　ョンは存在しないし　社会も成り
　立たない　痴狂人が実際に存在し
　ている理由の証明できぬ
だから我々のことばをひとつにし
　信仰もひとつなのを確かめるため
　にも　アクマのジクラットを建設
　しよう』
『四ヶ月も晴れたる大海原に漂って
　百姓ら菜っ葉を作り豆作って　漁
　師は魚を取って　アクマ様へ御供
　えしなくちゃならん　収穫祭の祭
　壇作らなくちゃ　でもアクマ様魔
　神の御像がなければ話にならん』
『マザーファッカーか　ファザーファ
　ッカーかどっちでもいいが　我々
　に精力与える男女合接の立像を崇

　めたい』
『朝太郎ユー太郎などアクマ教の神父
　か司祭　我らはアクマ堂の中で
　誕生祝　結婚式に葬式　男女の性
　愛行為を供養したい
何んとか立派な魔神像建立を望みた
　い』

このニセモノ語り部がモノ申す
生活のカッタルサ　異常な色欲人
様々な体験をした人は女でも男でも
ない　巨大な生殖器ヒジュラ(注)の
ような大淫売に　男をして女をして
不可解な　ガタガタと慄えさせる暗
黒の欲情に　怠慢な己を驚きと戦慄
に飛び上がらせる心の解放　ネハン
の境地
天気とバカ広い海と空の中に　孤独の
心に芽生えるキングソロモン　被虐
邪智淫　破壊王　それよりも母なる
大魔女の醜悪な顔容
漫漫とした不条理な不満と不安を呪い
祈って満ち足りる巨母の像　神を拝
まぬためにも邪悪女神は絶対必要
広い海と限りない太陽の光の中に潜
む　殺戮の誘惑
満面にフキツナ喜色をたたえ　見るも

のを妖げなる陶酔に誘う両性具備の
大淫女
母のセクシーの　ギタギタした欲情の
血をもって帰結するアクマの偉大な
パワー　狂人をも普通をもグドンを
も狂喜させる　絶対平等なる大母胎
土マンジュウなる妙なる力　その御
前に立ちて　己の首すら斬り落し
捧げたくなる
神を裏切りアクマを裏切った後の快楽
善悪両具の女神への大喜悦―不穏な
欲情因子
それが魔神形に混入されて様々な像と
なる　その中に口から血をたらしニ
タニタ笑う普通人がある　権力で弱
い者をイジメ抜き　満しても満して
も果てぬ欲望に蒼白に痙攣する女形
男装の元官僚がある
フカシギな激情の胎動　イケニエが欲
しく　イケニエそのものとなって狂
い踊る豊穣の喜悦　不穏な血が肉が
破壊と殺戮の暗黒の狂神
ワッハッハ　これが隠していた夕太郎
の本性　聖職者なんてこんなもの
抑えられ歪んだ欲情　人とはこんな
もの　この獣性を縛り戒めるために
十戒や掟があったのだ　アクマ様は

こんな足枷首枷を解いたのだった
朝太郎が何んだ㊥の下らぬカンブがど
うした　ワシはこのイマワシイタ太
郎の名が憎い！　今こそ有志を集め
アクマを崇め　その像を作らんとす
絶対無比のアクマ魔神様　このわたく
し奴に力と御加護を！　我を産みし
は玄妙なる巨母　玄牝様！　その裡
に我が身を入れさせ溶液で御溶し滅
して下さいませ！
―と語っていたところ　マルキのカン
ブに見つけられ　ドヤされて　あわ
てて船底へ逃げるなぞの男　チョッ
キン　チョッキン　チョッキンナー
（注）
かっては光である神に仕えた牧師　は
たして彼は　神はアクマであると悟
った身か　それとも昼にあっては神
をキッシ　闇にありてはアクマを喫
す二重身なのか　少なくとも結構な
変態爺ではあった
でも分からんこともない　息子ばかり
が入ればいいものでもない　巨母の
巨大なそれの中に　我が身を入れて
溶かして欲しいのは多くの男性が望
むこと　中国にも韓国　沖縄にも亀

甲墓はバカバカあるではないか
代わってこのわたし―仏陀につき従う
アナンの如く長さに渡って仕えた語
り部をさしおいて　何やらアンチ朝
太郎思想をわめき散らして逃げて行
ったのは何者か　あるいは出しゃバ
リの夕太郎か
とんでもない　飛んでも八分歩いて十
五分
―重複部分もあろうけどこの真の語
り部のわたし奴が　まずは前者の言
い分全部を打ち消して　イカサマ
アクマ―朝太郎の精神を申し上げ奉
る　しかるに―アクマ法典ことはじ
め　第一章には
始めにチンポ　マンポありき　チンポ
マンポはアクマと共にありき　チン
ポマンポは力なりき　チンポマンポ
は命なりき　チンポマンポはアクマ
なりき人なりき　アクマは闇に輝き
神はこれに勝ちを得ず
悔い改めない罪深き人々にハラカイタ
神々は大洪水を起こし（実は北極の
氷山が一斉に流れ出したのだが）人

ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO

類をメツボウの　に追いやったのだが　アクマの　児朝太郎一派は執拗なる神の暴力に耐え生きのびたのだだがうっとうしい雨の下船底の中
人々の気が高まってスッタモンダの騒ぎがあって　それが晴れの甲板の上で雨霧消散して　イヨイヨ人々は生きるため　ノーギョウ　ボクチクギョギョウ等の食料カクホが始まって　それに付随したいろんな労働始まった
サッサと逃げるは石頭　死んでも尽くすは阿呆連―という訳ではないのだが　挙国一致団結　クレジニアを振起すべく労働は　次第に好き嫌い向く者とそうでない者　途中でイヤになり別の仕事がシタイやつも這い出した
石頭寺門の元官僚の一部は前々からクスブッテいるし　管理の仕事がしたいのも組織の中でグーダラ生きたいのも　体をハッテチンポもハッテ生きたいのもある
気違いにもアホーにも　善人にも悪人にもなり切れぬ複雑漢もある　そしてついにものを創り残そう　諸行有常　諸方有我の罰当り屋も生えてくる

雨天につづくバカ天気も　多くの者には不快の種となる　何しろ雲ひとつない青空は無限の空(から)んぽで　果しのない空虚感に人の心を満たしてくれるム所ヅトメの長かった者　精神病院ズトメの古い者達　鬱さんとてか今もなお　やはり何かに押さえツブサレていないとおかしくなる　非常な監視人や悪質医者が懐しい
サラニなお　箱船の善人悪人多くの者達の本ネは　己自身に重い罪障感じ三途の河を越えられぬ者と自覚する者ばかり　小供の姿とはなって賽の河原に石を積み　父恋し母恋し　アクマ様お許し下さいと泣きたいヤツばかり
誤楽もないし　キョーヨーをつむようなものは御法度　和光同ジン難しい者　一億総ハクチにするテレビもバクチする所　コチンパ屋　飲み屋もイン売窟もない
心空しけゃケンカもおこらず　海に風もおこらず波立たず　人々チンポも立たないしマンポも広がらない
やはり人は何か方向性が欲しい　ヤル気が欲しい　行けどもイケドモ水平線と広い空　被害者も加害もし足り

ない復讐気分すらオコラナイ
何かやりたい　何かをしたい　形あるものに拝みたい　このままでは気が狂う　第一産業クソ食らえ　心の中からワキオコルむらむらした力が欲しい　燃え上がりワキタツ熱情と情熱がホシイ　若さがホシイ
なのに何百日も何千日かも　ハカリ知れぬ日々を海の上を走らにゃならんし　それすら走ってるのか止まってオルのか這いつくばっているのか
ワケが分からない
それゆえに第一次産業の農林五号を掘るやつも　魚の目玉をほじくっている漁師にも　狂った者ナラなおのこと　何かシゲキと感激が欲しくなる
女はみんなにイキ渡らないし　女の方もバカくさくてサセル気にもならない　酒もナイ
処詮　人類の歴史　文明科学　戦争なんてのはこのヒマでヒマでしょうがないところから興ったもの　子育ても名作名曲作りもバケ学もヒマと余暇をもて余した結果できたモノ
余暇どころか本暇も然りヒマの産物
何か下らぬものはないかと考えるのが本暇どり（本歌鳥）　王様も忠臣

も人々も作家も本暇どりが人の裡に
は虫がいる　人々まさにアクマのウ
ンチにわいた虫　その虫はヒマをも
て余してムズムズ動く　人はムズム
ズ動く虫である＝パスカラナイ
そんな虫共集まって　ム所の看守なつ
かし　包丁もって闇の中に　メガネ
をピカーッと反射させて　手術にや
ってくるキチガイ博士をコイ慕う
空手二段の女ヤクザ看護婦が恋しい
生活のカッタルサ　海と空の漫ズ漫ズ
がイラダタセル　箱船人の不条理と
欲求不満が
何かを造ろう　何かの形になろう　祈
る対象が欲しい　そこから別のパワ
ーが生じる　ヒマという穴はふさげ
る　求めよさらば得られん　叩けよ
さらばコブができん　ところがみな
みな違ったアイデア　ビジョンがあ
る　これじゃ世界中何万もの神があ
るのもうなづける　神とは次から次
へとくりヒロゲラレルいべんとみた
いなやつだ
だから今さっき　何者かが言ったよう
な巨母思想が　ええじゃないかええ
じゃないか騒ぎみたいに広がってゆ
く　我らロードアクマの下に平等に

平和に生き　満ち足りたはずだった
のにニューファッションか　新グル
メみたいのが　まき興る
少なくともそんな動きを目ザトクさっ
ちしたのが夕太郎ではなかったか
してみると神を裏切って㊥牧場にや
ってきた彼と彼の一派に（神の畑で）
マ女信仰　アクマ礼讃　アナクロニ
ズム　動物志向のこやしが　日の当
るカンパンの土の中で何かを育てて
しまった
語り部は屁に先んじて憂う　クレジニ
アカントリーの憂国の志士だから—
こうした動きに朝太郎はいかに考え
対処してゆくつもりだろうか
いつか師はわたし奴に語ったことがあ
る　ミルクにエビカニをひたして食
べる者が裏切ると—師は予見されて
いたのだ—
如是我聞　一時朝太郎在箱のカンパン
㊥の幹部や石頭　痴狂人　普通人
元ヤクザ犯罪者に囲繞され　笑顔で
優しく申べたもう　夕太郎一派も座
って聞いている
「言うべきか　言わざるべきか　四十
九日考えたあげく　芸術家はワー

シッパー（アクマ崇拝者）　偶像
礼讃主義者に答える　無始無終に
して時空を超越したアクマの像を
刻んではならぬ　像に祈ってはな
らぬ—』
と一言　次にまたまた好物の悪物語
「わしは先日夢を見た　山があった
山にはたくさんの人がいて　眼下
はるかに地平が広がっていて　四
方は海であった
円形の地面の中央に山があり　シユ
ミ山世界の如くであった　山の頂
にひとつのイスがあって　アクマ
と神は仲良く腰をかけておった
二柱は笑顔で話しておられた　聖な
る黒羊や牛や竜神もおった　二頭
の白象が二神の両側にあって　頭
上にマンダラ華を降らせておった
とり巻く人々は善人と悪人と普通
人であった
やがて神は人々に語った『方便であ
る』と　魔神もうなづき　人々も
うなづいた
『神も魔神も同じもの　法も不法（アダルマ）も同
じも　愛憎も善悪もみな清い連華
から生じたものであるなら　みな
同じである

ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO

無明も明光も衆生を教化するための
方便　神もアクマも美人も悪人も
クレージーも　聖者も異端みな手
に手をとり合う日迄の方便である
一円ブタイに大火所焼時　我此土安
などというものはない　善も悪も
必要あって存在し　その因縁ゆえ
に消滅する』

すると地中より天使やアクマや悪菩
薩が数多く涌出して二神に合掌し
『善哉悪哉　悪神善神　諸説の如
きは是れみな真実ナーリー』と二
神の話が正しいことを証明したので
神と魔神はひとつに合わさって　オ
レンジ色の雲の彼方に流れて消え
ていった（注）

天地開闢以来　天に星　地に花　人
に愛なのに　バカで欲張りで一族
優位しか考えない者達が豊かに生
きてゆくために　勝手な良いこと
と悪いことをデッチ上げ　良いこ
とは神　悪いことはアクマと決めて
しまっただけ
だから寺院はできる　ケーム所はで
きる　文化科学は発展する　戦争
は起る　差別　身分　貧富　賞罰
がある　弱い者悪い者はイミのな
い地獄へと堕された
けれど神とアクマと人は三身一体
その人が　食うこと　寝ること
着ることを捨てれば　人もアクマ
も神も消滅する　そのように生き
るためにアクマは箱船を遺したし
神とアクマの戦いのために生きの
びたのではない
悪はまだ続いた　嫌な夢となった
箱船が船体をうちつけた所は山の頂
上であり　船は難破すると共に水
は引いていった（実は南極北極ヒ
マラヤ山脈に氷河が戻ったため）
山が現われ地平が広がり　人々は船
から下りて行って　大地を耕し家
を建て　人も増えていった
するとなにやら互に暮らすためキマ
リができ　集会場ができ　指導者
が現われてアクマの教会が建った
悪人と善人が区別され　アクマ教に
は分派が生まれ　聖なる白羊と邪
悪な黒羊の区別差別ができ　芸術
家共が勝手にアクマの像　神の像
自分らを偉大な者として訳の分か
らぬものを創り始めた
アクマはクレージーの上にクレージ
ーを作らずなのに　アクマのチン
ポマンポだけは祈られ教典は残る
のに　リコー者　奴隷　痴狂人の
階級が定まっていった
神とアクマは嘆いた　人をして原人
にキツネザルに　ネズミに迄退化
させる計画も捨ててしまった
やがて天地は暗くなり　地は六度震
動した　太陽系を含む銀河は暗黒
星雲にのみこ込まれていった―

悲しい夢だった　やっと箱船に乗っ
て新天地　クレジニアを目指して
生きのびた我々すらも―
箱船の人々よ　智を捨て学を捨て
神を捨てアクマを捨てようではない
か　我々は神もアクマも拝んでなら
ぬ　チンポマンポを称え　食うこと
寝ること着ることだけにし　原始主
義　動物至上主義に生きようではな
いか　ものを造ってはならぬ　創る
ことは罪である　このために人類は
神々に滅ぼされたのを忘れるな　つ
まり我々は人ではなかった　人でな
いからこそ助かったのだから―」

新編・マンモス交番

望月大成

PART 8

ポケサツとメディアが組んで大芝居
　トップ上裕
　　まんまはめられ

スパイさせ　事のついてにたかりまで
　三上忍法
　　まさに神髄

上祐がまんま忍者の裏のわざ
　ばちりむしられ
　　三万の損

ポケサツはくすねた金は返すべし
　法定利息
　　落とし前つけ

ポケサツに返す気あらば見逃し
　お取次ぎなら
　　大成でよし

明らかに桜田忍法　三上流
　山と一ツ家
　　同じ手口も

大成

スパイにはたかりやらすな　三上殿
　思い起こせよ
　　長官の訓

元刑事

ノーなしのぶら下がりでも救いあり
　人間性じゃ
　　三上より上

三上流　まさに神わざ　オウムまで
　コロリだましは
　　たかり屋の腕

馬子

ポケサツが見習うべきは毛語録
　人民の財
　　針の一本

大成

三上ならスッカラカンのお召し上げ
　星のお財布
　　底の底まで

大成

上祐のポケットマネー　その実は
　信者のお布施
　　人民の財

馬子

スパイにも市民のルール　守らせよ
　星にたかりは
　　針の一本

正大師　うっかりミスもいゝところ
サツが楽屋で
高笑いして

上祐もはめられ放し　ポケサツの
裏のからくり
手も足も出ず

スパイには生活指導　ちゃんとやれ
でたらめ人生
馬人の屑

やれぬならばドケチはするな　銭持たせ
どうせ裏金
ドブ捨てのポイ

元刑事
地獄耳　忍者三上が大ぼやき
金食い虫に
大弱りとて

大成
金食い虫　承知之介で請負わせ
後のドンケチ
そこが問題

大成
ポケサツは見習うべきぞ　犬とても
糞の始末は
飼主の役

馬子
三上なら犬は飼っても知らんぷり
糞の始末は
ひとまかせして

大成
スパイから施し要らず　我慢の子
後の祟りは
倍のお返し

元刑事
下手すれば三倍増のぼったくり
これぞポケサツ
忍法の内

大成
小わざ手も次から次とボロさらし
ほんに忍者は
バカの集まり

元刑事
スパイから水増し成果　サツ知らず
う呑みの報告
後のぎくしゃく

仲間
手を切れよ　三上の手先はならず者
生涯君に
スッポンの首

大成
大成は金ノ字一家と無関係
サツの謀略
いつか対決

民間の協力員とはお看板
中身ヤーさん
桜田の内

大成
サタデイはスパイのペーデー　あゝ悔し
レストラン行き
あいつ三上と

馬子
妬くまじぞ　昔たんまり　センセとて
後の楽しみ
鍋蓋の店

大成
浅警の××刑事は功労賞
村田、バングラ
既にお縄は

元刑事
ほろぶちゃん　ほんに気の毒　時の運
オウム捜査の
とばっちりを受け

黄金町
絶対に近づくならず　あいつには
顔を知られば
後の災難

大成
あいつならたこ入道のバカ力
泉絞めるは
鶏の首

右翼
センセーの意見拝聴　喫茶にて
コーヒー一杯
馳走したれば
元刑事・解
明らかに三上の手引　お得意の
ケチ丶作戦
コーヒー一杯
くる奴はどいつもこいつも三上流
ほんにどんけち
コーヒー一杯

元刑事
絶対に入れてはならず　たこ入道
泉の二の舞
君あの世行き

大成
用心棒　ばちり手ぐすね　そこ壷へ
封じ込めして
葬儀屋の餌

馬子
ひどいなり　スパイのお手当　安過ぎぞ
三上ちょんぼで
ぽっぽ入りやも

大成
図星なり　ケチの三上がその証拠
手下ピー丶
アップ丶は

大成
ペーデーは週の木曜　三上きて
行くは　ジョナサン
地下の蔵前

仲間
木曜に大ふるまいのあの野郎
我がその顔は
サツの銭こで
スパイにはまともな奴を使うべし
一代雑種は
四つ足の内
大成を義理人情でマイコンも
打てど当たらず
下手の鉄砲
スパイにはたんまり持たせ　裏の金
しみたれ三上
相も変わらず

元刑事
口封じ　何も知らねど裏があり
すぐに離れよ
一ツ家の街

大成
殺された泉の二の舞い　後免でも
行くあてなしの
檻の　馬では

住民
ホントかな　ソロパチ上手の忍者とは
子分の面倒
星にみさせて

大成
見ることと聞くこととでは大違い
バチリ体験
ポケサツの裏

大成
麻原の言葉ならねど動物界
犬は馬より
格一ツ上

馬子
悪知恵の犬は稼いで三百万
馬はおこぼれ
たった七十

大成
情けなや　サツのバイトが七千円
夢も名誉も
ドブ捨てのポイ

馬子
生き別れ　妻は嘆くぞ　七千円
にんじん亭主は
馬になっても

馬子
ひっよとして巡査部長の三上とや
上前はねて
センセ七千

元刑事
あるやもな　余禄たっぷり　この世界
七千円は
ちょいとはね過ぎ

元刑事
スパイとて探るばかりが主にあらず
ゆすり、たかりも
お役目の内

大成
大詐欺師　村田ほころぶもムショ出れば
山でスパイは
昔取る杵

鍋の蓋
信心の心足りねばスパイ落ち
さいたる見本
ドヤの大成

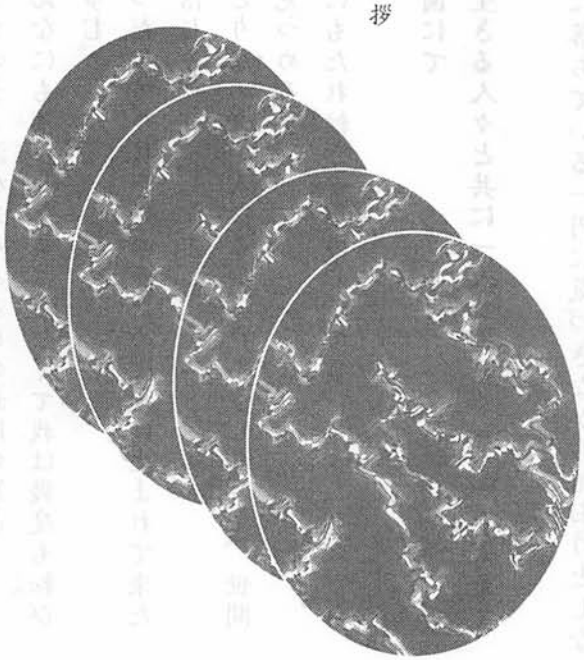
大成
信心の奥儀を知らば又オウム
山で終生
日ノ丸の敵

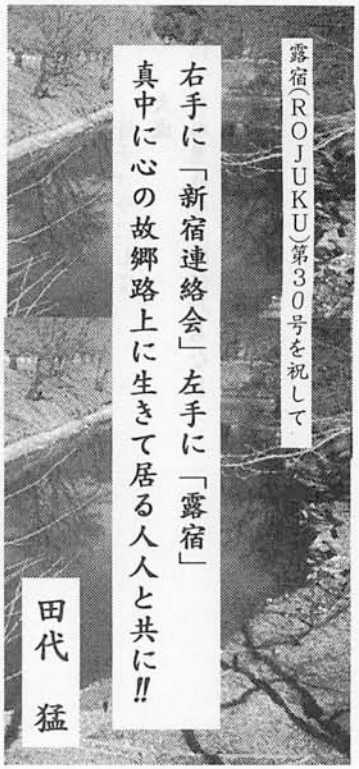
大成
時くれば忍者三上は格下げで
場末の街の
交番の前

乙姫
その時はセンセといっしょ　御挨拶
どんな野郎か
つらを拝んで

住民
頭下げ　頼みくるやも三百万
過ぎたることは
皆チャラにして

大成
身につかぬ悪銭なれば値打ちなし
買えぬ名誉は
億の金とて





夢に向かって生きる人達が居ます。新らしい人生を見つけた人達が居ます。本当の自分を見つけた人達が居ます。忘れかけて居たあなたの夢を人生をどんなに悲しいときにも、どんなに苦しいときにも人生を自分を見つけて下さい。……と。

そんな夢を、じっと、じっと描きながら生きて来ました。獨りの老人が居ました。

一、走り出せば憧憬の如く雲の湧くまっすぐな道果てしない道。

一、別々に一生を生きて行く友よ、あなた、そして君、ありて、我この世明るし。

一、明日有ると思うなかれと老いわれに何の夢託して生きづく。

一、ラストシンのつづきのやうな雨に濡れ、わが居室に帰りわれに戻りぬ。

一、イラクの子よ涙が光るある日の新聞の寫眞。

一、こんなにも踏みし落葉は優しくて我は幾度も転びて歩む。

一、いつだって今日を始めるためにだけ生まれて来たと信じる朝。

一、ひとり居の老い人なるか、戸を少しあけて、世間を見つめる夕。

一、背にもたれ輕き安堵のや春の雲。

新宿公園にて

路上に生きる人々と共に一人つぶやく「今」を考えて

路上に落ちている一円に気づきながら拾おうとしない私。一円拾おうのに腰をかがめると七円のエネルギーを消費するといった話を思ひ出して苦笑した。でもちょっと待って。私の一円が、あなたの一円が君の一円が……と集めると日本中で一億数千万円になる。ついでに大根一本買って五円の消費税を払うとなるほど莫大なお金がいともたやすく集まるものだと感心し、

その一方で借金に、借金を積み重ねても、気前の良いこの國は憲法なんてどうでも解決できると他國に自衛隊を派遣し「歴史」のカードを大きく切った。戦争を知る人も少なくなったけれど昨今のニュースの中に六十年前の再現かと思われる風景が重なり「こうして歴史は繰り返される」と思うとその渦中に生きていることと自体が恐ろしくなってくる。

無力無名なたった一人のつぶやきは、一円の価値にも等しいが、草の根の一円を集めることで世の中は少し、少しずつ、動いて行くのだと思う。そう信じる。そのこと信じて「今」を考えたい。そうして「新宿連絡会」と「露宿」とのつぶやきの一声一声が弱き人人の心の歴史に奥深く刻み込まれてゆくことでせう。

一人のつぶやき77歳の老人でした。

五月の青空に鯉のぼりの「ハタ」がひらめき「ろじゅく」30号を青空の鯉のぼりが有難う、ご苦労さんと風にたなびきながらささやいてゐます。その日を心に刻みながら…。三月二十五日春冷えの日に記す

長丁場だから焦らずに行こう

地下鉄の驛に着いたのは開会時間を一時間も過ぎていました。ピースパレードがスタートをする日比谷公園へのB3の出口を探していると、雨がっぱを着た高齢の男女が前を歩いています。ついて行けば間違いないと思ったときに耳に飛び込んできた会話「天気が崩れてしまいましたね」「長丁場だからこんな日も有りますよ」20日土曜日世界の都市がイラクの戦争と占領に抗議する中、東京での参加者が少なかったと言う心配は「長丁場」というここに集う人の潜在的な力を感じさせてくれる言葉で吹き飛んでいきました。それぞれの意見を盛り込んだプラカードの多様さはピースアクションが新たな段階に移行しているのを感じさせました。パレードに参加することで即イラクが平和になるとは考えていませんが、平和への思いを遂げるために一人からでも努力を積み重ねる事が一番の道だと思ひを強くしました。「健やかに行くものは遠くまで行く」という大好きな言葉を喚起させてくれました。それは「長丁場」という言葉でした。新宿連絡会、NPO法人「もやい」、これから長く遠い「長丁場」だと思ひます。私もその「長丁場」を生きる限り支援し共に進もうと思っています。その思ひでこうして「露宿」に記してゐます。

無題

五林修

今日も、仕事に就きたい。身支度きちんと整えて、どれ風呂でも行って番台の母ちゃんの顔でも拝んでくるか。

足取りも軽く急ぎ往く。風呂の玄関で茫然とする。シャッターが降ろしてあり、〝定休日〟なのだ。

八百屋の店員に、他の風呂屋さんを、たずね又歩く。新聞配達の兄ちゃんにも聞く。横丁を抜け、路地裏を抜ける。煙突が、立っている。

何に、煙突かあ。

写真家、橋本弘道氏の顔が浮かぶ。

公衆浴場を崩し、その跡地に建ったのが、〝希望の家〟で、その横丁が山友会、山谷クリニックそして代紋が目の前をちらり。

サンライトの跡地に建ったのが、老人のドヤいやちがった老人ホームである。

死の家の記録なんてあったような、ないような定かではないオイラの記憶装置も、オーバーホールを必要としている。

風呂に演歌が流れ、湯の中で一杯飲んでいる場合ではない。天王寺ステーションビル内でオイラは片付け人夫となる予定なのだから。

夢をみる旅も、疲れ果ててする旅も、人の心からの願いがすることであろう。性急な事が、背後に迫る実感に、逃避を図る事も、心からの願いのすることであれば、人は何を願い夢をみるのであろう。

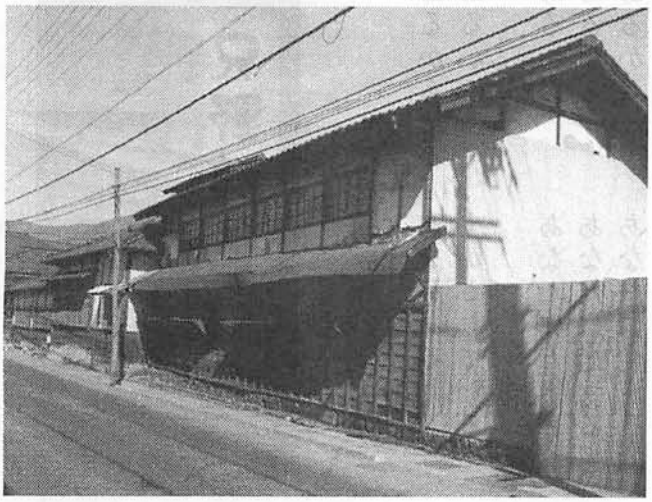
馴れから来る倦怠も、日々の習慣から来る束縛も心からの願いではないか。しかし、何を夢み、何に疲れ、心の願いが何であったかさえ思い出せなくなっている。息つく間もなく駆け抜ける現実、くるりくるりと変る場面、それを前に茫然と自失するしか術を持たぬ宿された命である。

炊き出しが、毎日曜日つづけれるセンター前で、〝消化不良、いや栄養になってないんじゃあないか。〟とアドバイスを受けた事がある。それから、食事を取るように、そしてよく噛むようにと心掛けた。体重も一

キロほど減少していたが、いまは五キロ程まで回復し、食事もうまいと感じるようになっている。
入浴も毎日するようにして、ゆっくりと疲れた体をマッサージしながら、よく水分を取り、汗を流すようにと心掛けている。

分らない。なら、分ろうとしようぜ兄貴。
出来ない。なら、ちいと汗を流してみようぜ。
或る街で、臆面もなく路上で酔って夢中になって狂うことも、他山の石となる。
何かを学ぶ姿勢というものは、誰れ彼れに強要させる場合もあり、されない場合もあり、で、ありとあらゆる事から、自分はどうすると選択できる。
犬、猫とちょっと違う動物らしさは、身近にある事に目を向ける事から始まる。雑多な廃棄物の漂う海の状況に、突然予想もしないゴジラが出現して、東京湾で何するの。　分りません。
言葉は、映像化され、そして消えゆくものだが、映像化できない、いや難しい言葉というものがあるらしい。
映像化され喜こび勇んでいる暇も束の間の事。奈落の底が、大きな口を開けて待ってますよ。

通おりゃんせ、通おりゃんせ
ここは、どこの細道じゃ？
どおおぞ通してくだしゃんせ。
おおい。天神様、いつから地主になったんだ。固定資産税は納めているん？！



今日一日

只野酔払

——只野酔払ことアルコール依存症のロダンは、この3月、胃癌が再発し、再び入院して手術を受けた。以下の原稿は手術後に病床で書かれ、AAの仲間の手を経て「露宿」編集部に送られ、今回掲載の運びとなったものである。——

今日一日

今日一日は飲まないから　明日がある
今日一日は飲まないから　未来がある
今日一日は飲まないから　生かされている

今日一日は飲まないから　あなたにときめく
今日一日は飲まないから　あなたに恋する
今日一日は飲まないから　あなたに愛を…

今日一日があるから　明日がある

今日一日があるから　未来がある
今日一日があるから　生かされている

今日一日があるから　あなたにときめく
今日一日があるから　あなたに恋する
今日一日があるから　あなたに愛を…

——ロダンの手術後の経過は幸い良好である。この号がみなさんのお手もとに届く頃には退院し、またAAのミーティングに通い、一日一日飲まない日々を積み重ねているはずだ——

初めてここ（山谷）に来てから４ヶ月近くなる。
はじめはどうしたらいいのかわからなかったけれど、すぐに慣れた。
ここはあったかいなあ、と思った。
はじめは、子ども連れで大丈夫だろうかと心配だった。
でも実際に行ってみると、みんな子どもを歓迎して大事にしてくれた。
子どもは敏感で正直なので、みんなの気持ちをすぐに感じる。
また行きたい、おじさんたちに会いたい、と言う。
私もそう思う。
はじめは、何か私にできることがあれば、という思いがあった。
でもすぐに、それ以上に多くのものを皆さんからもらっているのに気づいた。
ありがとう。
心から有難いという気持ちがわいてくる。
私は、ここに来るたび、人間のやさしさを感じる。

人生いいことばかりではない。
世間からひどい仕打ちを受けることもある。
腹の立つこと、絶望することもあるけれど、それに耐えて、耐えて、ここにいる。
そんな苦境にありながら、ふとした瞬間に、おじさんたちが見せる笑顔や思いやり。
そうした瞬間を見るたびに、私の心が洗われていくのを感じる。
人間って素晴らしいなあと思う。
競争で勝ち抜くことよりも、もっともっと大切で基本的なこと。
助け合うこと、許しあうこと、受け容れること。
ここにいる人たちは知っているような気がする。
生きるために必要なこと、人間として大切なことを。

私はここに来るたび、大事なことを教えてもらっている感じがします。
どうもありがとうございます。

A.S

2004.2.2

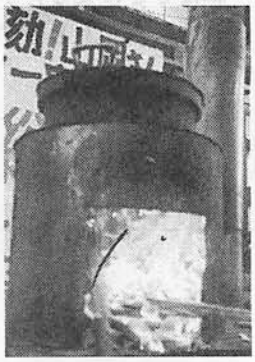
カてびにはまた
"火"は入れられない
"火"が入ったら
"炊き出し"の始まりなのだ　04.1.24

"命の火"は炊かれ
始まるのだ

炊き出し

炊き出し始める
準備を始じめた今日も…!

みんなわりと
楽しそうに始まった
極寒の日…いだけど
だがしかし
楽しそうに始めるのは
野菜がきざまれ
肉がきざまれ
始めの準備は
それが火を土るのが
楽しいのだろう



京都から初めて来ました。
山谷に足をふみ入れて
いきなり厳しい応対を受け
ました。
走り回り、人と話し、山谷に
自分をさらすことから
始めたいと思います。
T.K

'03.11.16

炊き出しに来て、一生懸命
米をといだり、野菜を切ったり
体を動かしていると、いつの
まにか、悩んでいた事も忘れて
いる。終った後は、何となく、
達成感がある。
それがうれしくて、ここに来る
のかな？　H.I

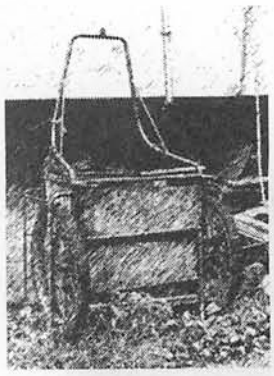
炊き出し

お米の中に入れる
にんじんがきざまれた

たくさんのにんじんが
きざまれている

お米のたしになる
にんじんなのであろう

今度はハムである
これもおかずになるのである
さきほどの人じんと
このハムは一緒に
'卵のカス'の中に
入れられるのだ



炊き出し

ジャガイモもきざまれた!
これは、少しでも
お米のたしになるのだ
お米だけではたりない

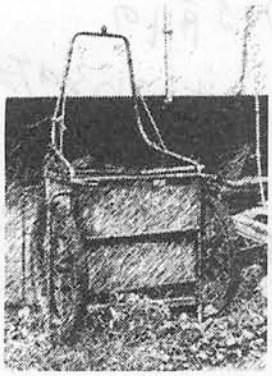
かぼちゃやジャガイモも
きざまれている
どっちにしても
お米のたしになるだろう
みんなは楽しく
きざんでいた!

'炊き出し'のカマドに
火の入る前の
用意がされているのだ

極寒でもあるのに
それも感じさせない
皆んなが労らいている
でも皆んな明るい!

きざまれたジャガイモ
お米のたしにはなるだろうし
みんなの'炊き出し'に対する
もてなしをもかえて来るだろう
火が入るた'カマド'も
しつしつの'カマド'も
いきおいよく
燃えさかった!

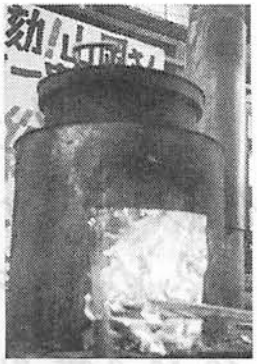
「炊き出し」



炊き出しのカマドに
火が入った!!

ニンジンや
味の入ったカマを
ジャガイモや
カボチャの入った
カマを炊き上げる
カマドは勢いよく
燃えていたのだ
このナニを食べる人々のだ
カマは炊き上がる

みんな元気よく
笑い合ったりして
笑いは広がる
炊き出しの
完成が楽しみなのだろう
笑いはおだやかであった
それはヤさの炊き出しだ!



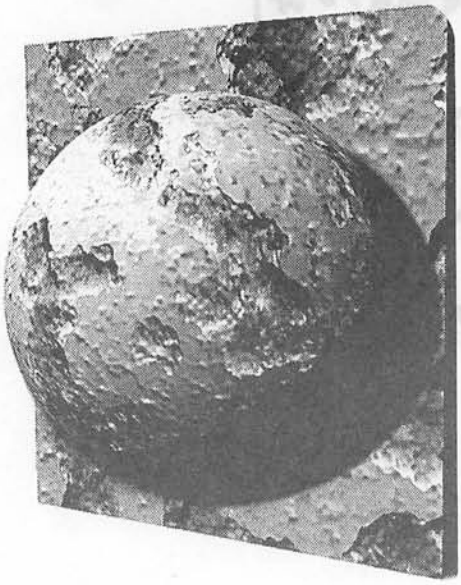
'04.1.18

'命の火'

命の火を炊く
炊き出し
カマの中入れる野菜なべもたき火
炊き出し始める前
カマの側に材料の用意
火はまだ入れない……
'生きている'炊き出し

地獄の季節

俺は、頭がいい。いい男だ。しかし誰も
認めてくれない。習せ場なし
ああ俺の宿命よ、どうてしてくれる
いつまでも、さむく、くらい生活。
誰かこの俺を春の生活に
誰も導いてくれない、



『惑星ひとつぶ通信』

春だし、水道町からも引っ越したし、新しいタイトルを考えた。

「やっぱり、モチはモチ屋だねえ」

最近よく出会うセリフ。色んな人の技術や才能に魅せられる機会が多く、そんな場に居合わせた中の誰からともなくこんなセリフが発せられる。意味は『物事はその道の専門の人に任せた方がいい』

看板屋だったというおじさんが「筆にぎるの何年振りかなあ…平筆(ひらふで)あるか？」と筆を受けとり何の下書きも無しに、大きな紙に見事な看板を書きあげた。最後の一文字がピタリと収まる。

「凄い凄い!!」を連発する私に「これがプロの仕事だよ」と一緒に感心しながら見てた人がつぶやいた。

ねんざして動けなくなった時、私のSOSに応えかけつけてくれた友人整体師のテキパキした処置にもみとれてしまった。

調理師の包丁さばき、水道屋の水道工事…

探してる本をさっと取り出してくれる本屋の店員…

誰にでもそれぞれにキラリと光ることのできる「舞台」というのがあるものだ。

先日「折り鶴」の折り方を説明したら「モチはモチ屋だねえ」と言われた。私は…何屋？

高橋美香

近頃「絶対繁盛しそうな店の名前をあれこれ考える。喫茶「廣虚」とか居酒屋「菌」とか。「こりゃダメだ、ステキにダメだわ」と、なんか面白い。

あかい花

はり師いが丸

一月。新しい年は都合がよい。うだつのあがらなかった去年をすっぱり切り捨てることができる。理由や決意を伴わなくても新しい希望を持つことができる。一月生まれのいが丸にとって、新年の抱負はその歳の抱負だ。年明けと共にまたひとつ歳をとる。寄る年波は感じるものの、もう若くないことに落胆はない。若さなんて邪魔なだけだった。そんなものはくれてやる。

二月。新宿西口インフォメ広場は変わらない。ガラス張りにし、寝起きする人々が去り、諸国名産の品を売ろうと、流行りのショップを並べようと、何も変わらない。煤黒さのかかった青白い蛍光灯も。都会の饐えたにおいも。花を手向け、手を合わせると「ごめんね」という言葉が口をつく。耳の奥に響く雑踏も変わらない。「忘れない」と約束はできないが「覚えている」ことはできる。

翌々日。留守電に久保ちゃんの訃報。録音内容を消してから、「血を吐いて死んで病院に運ばれた」ではなく「血を吐いて病院に運ばれた」という伝言だった気がしてきた。とんでもない思い込みで花を持ってテントに行ったら、「勝手に殺すな」と怒鳴られるんじゃないか。そしたら、供え物になり損ねたワンカップで乾杯してお礼を言うことにしよう。「いつもありがとう」と。

三月。風が吹くことなしに春が来ることはない。春とは、それを待ち望んでいる時期のことかもしれない。桜の頃には既に通り過ぎている。春の風は苦手だ。いつも人をあちらに連れてゆく二月は厭わしいというのに。風をこらえるより先に耳を塞いでしまうのは、火事の記憶がよみがえるからだ。

春を迎えるのに準備はいらない。気がつけば諦めの表情で枝を見上げている。秋は夏を消し去るが、春は冬の残りに触れようとはしない。春支度をするのは、希望が勝っている人と、花粉症の人。扉を開けて出発しようとしている人を見ると、冬を消せない面持ちを憚るようになる。

桜が裏切りをみせるのは、むしろ常のこと。開花宣言の翌日から一週間、東京は雨に震えた。雨の初日から感冒を患い、記憶の薄い日々を過ごした。微熱の続く中、夢だけは鮮明。「新年」とはいつまで続くのか？抱負は抱くだけでは泡になる。

四月。今年もういない人たちを認めるのは、去年も咲いた同じ桜の下。酒飲みは、桜が咲いたと酒を飲む。暑くても寒くても酒を飲むが、理由は尽きないので忙しい。

横顔ばかり見ていた連れが、次の一歩を踏み出していった。私が隣にいる時期は終わった。後ろからそっと応援できる位置に立ち、その背中を見送った。

私は飛び立つことも羽ばたくこともできないが、歩くことはできる。「ごめんね」も「ありがとう」も結びの挨拶にはできない。それだけではどうにも表し切れない、溢れて迸る想いが、もう一度顔をあげさせる。今度吹く風は、草のにおいを連れてくるだろう。

みなさんへ

死なないで下さい。
もう、誰も死なないで下さい。
これ以上、人が死ぬのは、見るのも聞くのも嫌なのです。
それまで、ぬくもりがあって、目も開いていたあなたが、
次の瞬間から冷たく動かなくなる。
そして燃やされ、あっという間に灰になる。

それが嫌でたまりません。
絶対に、『死』が、嫌なのです。

だから、誰も死なないで下さい。
お願いします。

恩田　美代子

次号31号は7月1日発行予定です。
投稿者の皆さん、原稿締めきりは
6月3日必着にてお願いします！

編集後記

「花見疲れもなんのその
今年の春も編集三昧…」

5年も編集をやっていればちょちょいのちょいと思われがちですが、編集作業は苦しい作業。頭がボーとし、指に力が無くなり、過酷に使われて来た機械までもがうなり声をあげています。ようやく一人編集体制も終わり、次号からは元の体制に戻れそうでホッとしております。一人打ち上げビールでも呑むか。　（か）

露宿ペン倶楽部短信

長い道のりを経て露宿もついに30号発刊となりました。99年6月に創刊号を発刊してから早いものでもうじき丸5年。こんなに長く続く雑誌とは思っていませんでしたが、これも路上や路上に思いを抱く投稿者の熱意の賜物です。30册の露宿に掲載された一つひとつの作品が私たちのなによりもの宝です。

表現者はどこにでもいる。表現する事で人と人とのつながりができ、より豊かな関係ができる。次なる目標40号へ向かって投稿者の皆さん！筆をとりましょう。

Rojuku

定期購読大募集

[露宿定期購読の御案内]

毎号確実に読者のお手元に届けるために当方では定期購読を承っております。

定期購読８回分　5000円（郵送費込み）

定期購読４回分　2500円（郵送費込み）

一回ごとの購入でも大歓迎。

一冊は送料込みで660円となります。

申し込み方法

郵便振替用紙（00160-6-190947ろじゅく編集室）に定期購読もしくは継続購読とお書きになり、住所、氏名を明記の上送金して下さい（発行ごとに郵送します）。尚、郵便振替の他、切手での受け付けもしております。FAX、メールにても注文承り中。

まとめ買いはお安くなります。

２冊以上は送料無料、５冊2000円、10冊3500円、50冊15000円（いずれも送料込み）となります。

「ろじゅく」

この雑誌は、路上生活者の方達が読み、書き、表現をする場を提供する為、つくられました。一冊でも多く雑誌を印刷し、路上生活者の方に手渡したい思いと、利益が出れば炊き出しのお米代にしたい為、心苦しい限りですが、多くの方のご理解とご支援をお願い致します。皆さんのお気持ちに届く、熱く丁寧な雑誌づくりを目指します。

購読費・スポンサー費
送り先
郵便振替口座
00160-6-190947
「ろじゅく編集室」

路上文芸総合雑誌「露宿（ROJUKU)」第３０号　2004年5月1日発行（隔月刊）
主宰・笠井和明　編集／発行・ろじゅく編集室　〒160-0023 東京都新宿区西新宿4-32-4-603
TEL／FAX 03-3373-9878／090-3818-3450（笠井）
Eメール・rojuku@d9.dion.ne.jp URL・http://www.d9.dion.ne.jp/~rojuku/
郵便振替口座　00160-6-190947　加入者名「ろじゅく編集室」
販売協力・新宿連絡会、露宿ペン倶楽部　　印刷・株式会社ラジオグラフィー

定価５００円